

難民という人生 チョウ・チョウ・ソーさんに聞く

人の痛みに敏感に ミャンマーへ郷愁募る

2013年4月20日 帰れる日のために能力を磨く



ミャンマーの民主化運動指導者、アウン・サン・スー・チーさんの来日に合わせ、東京・東中野で1本の映画が上映されている。「異国に生きる」(土井敏邦監督)。軍事政権の弾圧を逃れ、日本に渡ったミャンマー難民の人生を追ったドキュメンタリーだ。主人公のチョウ・チョウ・ソーさんはミャンマー難民のリーダー的存在。日本で民主化運動を続ける一方、一昨年(2011年)の東日本大震災の際は、大勢のミャンマー人を集め、被災地でボランティア活動をした。

「民主化運動をしたことで多くのものを失いました。日本に来て22年ですが、一度も帰国できず、その間に両親は亡くなった。自分のことだけを考え、日本で働き、お金をためて国に帰る生き方もあったと思います。でもそれはできなかった。僕にとって一番大切なのは他人の痛みを感じることです。ビルマ(ミャンマー)にいる同胞が自由も豊かさも手にしていない時に、自分だけがチャンスを独り占めにすることはできません」

1988年の民主化運動に参加、身の危険を感じ、91年に来日した。

「当時、僕は会計士でした。軍事政権では国の未来はないと思い、運動に加わった。でも政権が弾圧に乗り出し、心配した父から『自分の息子が刑務所に入る姿は見たくない』と言われた。そこでタイ経由で日本に逃れてきたのです」

「日本では建築現場や電気工事店、飲食店で働きながら民主化要求のデモや集会に参加しました。難民だから仕事を選ぶことはできない。生きるため手に入る仕事はなんでもやった。自分のやりたい仕事ではないから、最初はずらかった。でも、いつか帰れる日が来る。そのために能力を磨かなくてはならない。日本は将来のための練習場と思って頑張ってきました」

個人的な犠牲は承知の上で民主化運動をした

言葉の問題もあり、日本での生活は大変だった。

「日本で苦勞したことはたくさんあります。大変なのは部屋探し。当時は外国人にアパートを貸す大家は少なく、なかなか借りられなかった。作業現場で嫌な思いをしたこともあります。資材を置く場所を間違っ
てしまい、怒鳴られたのですが、日本人が同じことをしても怒られない。差別されていると思いました」

「日本に来た当初、家に電話すると、母は『会いたい、会いたい』と言っていました。でも3年目から、『元
気か』としか言わなくなった。母も僕が帰ったら危険だと次第に理解したのです。結局、母とは二度と会う
ことはありませんでした。10年前に心臓の病気で亡くなり、葬式にも行けなかった。でもそれは仕方がな
いことです。民主化運動をして個人の人生に得になることはない。それを承知でこの道を選んだからで
す」

日本は欧米に比べ難民の受け入れが少ない。98年によく難民認定された。

「日本は難民に厳しい国なので、申請する時は不安でした。不認定になったら捕まる可能性もあり、強制
送還の心配もある。入国管理局の対応は厳しかった。『なぜ日本にいるのか』『何をしているのか』と矢
継ぎ早に聞いてくる。そして言われました。『お金を稼ぎに来たのだらう』と。初めから難民ではないと決
めつけている感じでした。日本で民主化運動をしていることを必死に訴え、何とか認めてもらいました」

「難民認定され、在留資格を得た時はうれしかった。妻を呼び寄せることができますからです。結婚して1
年で日本に来たので、妻との生活は短かった。妻は『早く帰ってきてほしい』とよく手紙を書いてきまし
た。それがどんどん長引き、僕が帰国できないと知った妻は出国し、バンコクにいました。すぐに迎えに
行きました。その日妻が作ってくれた手料理は一生忘れられません」

難民も日本社会の一員

東日本大震災の後、東北の被災地に向かった。

「テレビで被災地を見て何かしなくては、という思いに駆られました。僕たちには小さなことしかできない。
でも強い気持ちでやろうと思いました。陸前高田に炊き出しに行くことを決めると、ビルマ人の仲間が
次々に賛同してくれた。彼らの中には失業している人もいた。でも自分たちよりもっと大変な人がいるか
ら助けたい、と言ってくれたのです。この後、石巻などでもボランティア活動を行い、被災地に3回行きま
した」

チョウさんが実践する利他の生き方は「人生とは何か」との重い問いを日本人にも投げかける。

「当時はもうビルマ料理店を開いていました。東北に行く準備をしていると、2階のお好み焼き屋のママ
さんが『ミャンマーの人たちも被災したの？』と尋ねてきた。妻が『いいえ』と答えると、ママさんはびっくり
して『日本のためにありがとう』と言ってくれた。僕たちは日本人ではないけれど、日本で暮らすこの社会
の一員です。困っている人がいれば助けるのは当たり前のことです」

「被災地では色々な人に会い、話をしました。僕は家や家族を失った人の気持ちがよく分かります。なぜ
なら僕も自分の家に住めず、外国にいるからです。日本は避難所と同じで、仮の住まい。でも僕には祖
国に帰るとい希望があります。希望があれば生きられる。被災した人たちも早く希望を持ってほしい」

祖国の民主化進展でその希望が現実になりつつある。

「国の民主化は始まったばかり。確かに政権指導部は改革に向けかじを切ったが、末端まで浸透してい
ません。スー・チーさんの話を聞いて祖国に帰ろうとの思いは強まったが、まだ見極めなければならない

ことは多い。本当に帰ることができたら、小学校の教師になって教育で国造りにかかわりたいと思います」

(編集委員 藤巻秀樹)

1963年ヤンゴン生まれ。ヤンゴン経済大学卒業後、会計士に。1991年に来日、飲食店などに勤めながら民主化運動をする。2002年、東京・高田馬場にビルマ料理店「ルビー」開業。02年から12年までビルマ民主化同盟代表。ビルマ語誌「エラワンジャーナル」編集長やNHKビルマ語放送アナウンサーも務める。